

反障害通信

20. 1. 18

88号

健康は義務なのか？—介護保険制度における義務規定—

わたしが住んでいる地域の市役所から、高齢者の健康に関するアンケートの書類が送られてきました。それで、そもそもアンケートというのははろくな事がないという経験で、ほっていたのですが、催促のはがきまで来ました。それで福祉制度の設計に必要なならば協力しなくてはならないかなと、まあ、どういう意識性でアンケートの項目を作っているのかということに関心もあって、とりあえず記入し出しました。

途中まで記入していて、目が点になる項目にぶち当たりました。「介護保険法では、国民の努力義務として、「自ら要介護状態となることを予防するため、加齢に伴って生ずる心身の変化を自覚して常に健康の保持増進に努めること」、「要介護となった場合においても、進んでリハビリテーションその他の適切な保険医療サービスおよび福祉サービスを利用することにより、その有する能力の維持向上に努めること」とされています。／国民に対する、こうした法律上の規定を知っていましたか。」として、「1 知っていた 2 知らなかった」どちらかに○をする質問項目です。介護保険制度が発足するときに、この義務規定が問題になっていたのですが、まさに転倒した話なのです。

古くから教育の義務と権利について、議論が起きていました。国家が強いる親が子どもに教育を受けさせる義務なのか、子どもの教育を受ける権利として国家が義務を負うのか、という議論です。これは、日本会議(国家神道というカルト的宗教的なことが靖国神社を媒介にして、憲法改正を推進するという政治的などところで動いている団体)に所属する国会議員が、「国家のために死ぬる国民の教育を」という話をしていたことにも通じます。

国家ということがもし必要としても(わたしは共同性が必要なのであって、共同幻想としての国家が必要だとは思えないのですが)、国家のための国民ではなくて、国民のための国家かなのだと思います。そのあたりが転倒しているのです。

最近、医療や福祉制度自体がおかしくなっています。リビング・ウィルとか、ACP(Advance Care Planning)とか、「人生計画」とか、いろいろ形を変えて、「終末期」医療に関する本人の意志表明を求めることが出てきているのですが、「健康寿命」などという言葉も出て来て、どうも、健康でなくなったら「早く死ね」というような、医療費削減のための「死への誘い」の類いのこととして出て来ているとしか思えないのです。

わたしは母の介護の中で、繰り返し介護施設や病院で、延命処置をどうするのかということ、意思表示というか、むしろ延命処置をしないような方向での意思表示を求められてきました。何か、福祉も医療も崩壊しているという感じを持ってきたのですが、今、いろいろな事件の中で、まさに「死へ誘う医療」や福祉の切り捨てを痛感して来ているのです。なんとかしないと、とんでもないことになっていくのです。(み)

(「反差別原論」への断章)(17)としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 88 号」アップ(20/1/18)

◆トップページの I に「ホームページの見方・検索の仕方」という項目を作り、アクセスしやすいようにしました。ちょっと構成をして、読みやすくしました。まだ、工事中です。「アーカイブ」を大幅更新しようとしています。草稿的な文は、移動させるつもりで、準備を進めています。

◆サブホームページ「反差別資料室 C」の文献表を、昨年度末までに新しく購入した本、読書した本の文献表を入れ込み、リニューアルしました。「反障害-反差別研究会」のメインホームページとリンクできるようにしています。

読書メモ

今回は、前回の読書メモの引き続き、相当な分量になったので、今回に回した小松美彦さんの対談集がひとつ、それから今話題になっている「反緊縮」関係の、雑誌での特集の読書メモがひとつ。また、トランプ支持層の心理をとらえていると、以前新聞で紹介されていた本で、しばらく積ん読していた本を、やっと読めたもの。ちょっと雑多な読書メモになりました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 521

・小松美彦『対論 人は死んではならない』春秋社 2002

この本は、小松美彦さんの対談本です。

「内容（「BOOK」データベースより）」があります。わたしのパソコンでちゃんとでないないので、一部編集して貼り付けます。

「死の自己決定権、脳死・臓器移植、安楽死など現代的な死の諸相を第一線の論客と徹底討議。多様な死の可能性が剥奪された現代にあって、ラディカルな批判を展開し続ける著者の、初の対論集。」

目次

まえがき(小松美彦)

プロローグ 人は死んではならない(小松美彦)

第1部 現代医療は私たちの生と死をどこへ連れてゆくのか

脳死・臓器移植問題から『あしたのジョー』まで(小松美彦)

脳死・臓器移植を根底から考える(対論 永井明)

生命科学と医学倫理(対論 小俣和一郎)

第2部 私たちの死は「自己決定権」で守れるのか

人の死はいかにして成立するか(対論 宮崎哲弥)

「死の自己決定権」を通して医療を見る(対論 市野川容孝)

自己決定権・共同体・死(対論 笠井潔)

自己決定権から共鳴へーフェミニストからの批判に答えて(小松美彦)

第3部 死の共同性をどう評価するのか

「死者との連帯」へ(対論 福島泰樹)

「死の義務」と「内発的義務」(対論 最首悟)

キリスト教思想にとっての生と死(対論 土井健司)

エピローグ 母から教えられた死(小松美彦)

わたしは小松さんの単行本はだいたい読んでいたのですが、この本は対談本ということもあり、読み落としてしまっていました。改めて感じているのですが、対談本というのは、ちょっと違った思想をもったひとの理論や思想をしるきっかけになり、そして対論をしている著者の理論・思想を他者から照射することによって深めることができるのです。

小松さんの文や発言は、いつもながら感じるのは、エッセー的な「共鳴する文体」になっています。また、死の強制や死への誘いを許さないという強い意志に貫かれた文になっていて、わたしも共鳴していて、追っかけている著者です。

余談的にわたしごとを書いておきますが、わたしは読書計画をもっているのですが、何か講演会があるとき、その講演者の著書を予習的に急遽挟むことをやっています。前回までの、読書メモは、「臓器移植法を問い直す市民ネットワーク」年二回の講演会で、天笠啓祐さんの「活性化する新たな臓器作り、その問題点とは？」というテーマの講演会があり、それに合わせた予習という意味をもっていました。もっとも、バイオテクノロジー関係の学習課題は優生思想とからめて以前から早く読まなくてはと、どこかで入れ込む予定でいました。講演会の告知があって、そこにたどりついたということです。で、その連続学習の中で読んだ、前の読書メモでとりあげた小松さんの本に続いて、長く積ん読しておいた本を引っ張り出したのです。これは、丁度 12 月 15 日のシンポジウム「安楽死・尊厳死問題を考える—公立福生病院事件と反延命主義」の予習という意味を持っています。司会が小松さん、そして、この本の中で、対論をしている市野川さんが、「特定発言者」になっています。

この対論は本のタイトルになっているように、「人は死んではならない」という著者の思いをテーマにした対論になっていて、別の言い方では著者の別の本のタイトルになっている「死は共鳴する」という内容も持っています。これは、福島さんとの対論の中で出てくる、「人は死んだら人の心の中にゆくんだ」という言葉にも共鳴しています。

さて、具体的中身を、目次にそって押さえて、キーワード的に抜き出してみます。

◇まえがき(小松美彦)

小松さんの文は、初めて読むと、いろいろ思いも湧き、コメントも出していくことになっているのですが、追っかけをしているので、ここではキーワード的切り抜きだけ。

日本的な「延命息災」というプラス的なイメージがあったところへアメリカ由来のマイナスシメージの *prolongation* の「延命」—「いたずらな延命」「無駄な延命」「もうけ主義の延命」が入ってきた。 i P

アメリカから輸入の生命倫理学—「生身の人間のこととして血の通った議論になっていることは多くはない。」 iv P

◇プロローグ 人は死んではならない(小松美彦)

「従来の心臓死の場合、死と死の判定基準はあくまでも別個の存在として把握されていたのである。」 7P

「このとき「死」は、死を死者にのみ封じ込め、われわれ周囲の者を置き去りにし、死とわれわれとの間に横たわるさまざまな事柄を切り捨てるものとなるのである。」 7P

一九九二年一月二二日「脳死臨時調査会」—「人とは一つの有機的統合体であり、その統合体を司るのは脳である。よって脳による統合機能が失われた場合、それは人の生とはいえない」 7-8P・・・脳も他の臓器から規定されているということを押さえていないという問題があります。

「「共鳴する死」—「自己閉塞する死」「死人」は「死」と共に存在を始める」「死人」を物として見る「脳死体」 8P

科学としての死と「自己閉塞する死」 11P

「「共鳴する死」とは、単に<関係の中での死>ということではない、<人は死んではならぬ>という願いを大前提にした思想」 14P—「共鳴する死」の危うさ→共鳴する生—「人は死んではならぬ」

「脳死・臓器移植の実態は、「二つの死よりも一つの生を」いった標語に象徴されるように、実はゴリゴリの功利主義」 16P—ヒューマンイズムの装いをこらす

ドナー—レシピエントの関係は、対の関係だけでない社会的影響 17P

自殺者のヒューマンイズム—ファシズムの芽 18P

「患者の扱い方のマニュアル化ということ自体が問われる」 18P

第1部 現代医療は私たちの生と死をどこへ連れてゆくのか

◇脳死・臓器移植問題から『あしたのジョー』まで(小松美彦)

『あしたのジョー』の話は、以前講演会ででていました。その時に、「本にしてください」という話をしたのですが、すでに一部でていたのですね。小松さんの文に関しては、後で、もう一度まとめて対話することにして、ここでは、切り抜きに留めます。

(アラン・シューモン<アメリカ・UCLA>1998 からのデータ)「これまでの世界の脳死者およそ一万人のうち一七五人の心臓が少なくとも一週間は動きつづけていたことが判明した。最長のケースは何と一四・五年で論文公表時にもまだ生きつづけている。他に、二・七年と五・一年という場合も示されている。」 30P

「脳死」という規定自体の作為性、従来の脳死の概念、①脳の形が崩れた、腐敗が始まった時点で脳死とする立場②機能不全というという意味(「脳不全」) 31P

厚生省の脳死判定基準—①深昏睡②瞳孔拡大③脳幹反射の消失④平坦脳派⑤自発呼吸の停止⑥①から⑤の検査がクリアされた後に、六時間して再検査して、再度クリア 32P

立花隆「脳死=脳血流の停止」の提起—従来の心臓死の判断と同じ→却下 34P

脳死・臓器移植は医療の名を借りた殺人 35P

ヒポクラテスの誓い—「医師は患者に対して害悪を与えてはならない。最善をつくさねばならない」→著者「患者を相互に比べてはならない」「絶対に目の前の患者だけを独立させて考えよ」—「脳死・臓器移植法の登場で、二つの命を両天秤にかけるようになった。」 37P

脳死・臓器移植の問題—①臓器移植における経済的格差の問題(臓器売買の恐れと実際)

②レシピエントの問題（イ.正負の効果・他の治療の可能性ロ.薬を飲み続ける必要・副作用ハ.感染症の恐れニ.移植された臓器の有効持続期間）③「脳死」とされるひとの治療可能性の問題（脳低温療法など）38-9P

「自己閉塞した死」と「共鳴する死」40P

「このような思い(混沌として湧き上がる思い)と関係の総体がゆっくり変革していく時間的な流れが死なのです。」41P・・・「関係の総体」という理論的・思想的キーワード、「関係性の総体」として深化・展開していく必要性

「死の自己決定権」―「自己閉塞した死」43P・・・近代的個我の論理と新自由主義的グローバルゼーションの「自己責任の論理」の増幅共鳴

「日本の今後の経済的な流れなどを勘案した場合、「死の自己決定権」は非民主的な脳死一元化に帰着する可能性があるということです。この事態は、民主的な仮面を被ってやってくる新たなファシズムではないかとすら、私には思えます。」46P

相互自己主張と議論、「問題なのは、自己主張するための情報がそもそも少ないし、しばしば操作されているということです。」48P・・・現政権の情報隠蔽と操作

(サミュエル・ベケット)「想像力は死んだ、想像せよ」50P

「『あしたのジョー』の)ジョーと力石のような関係は、こういう腐敗した社会の中ではなかなか実現できません。けれども、少しでも生み出し、そして拓げていきたいというのが、私の思いです。換言するなら、それが「個人閉塞した死」から「共鳴する死」への転換なのです。これは、つまり、自閉的に生きる<私>から、人との関係性を共存する<私>への転換なのです。」52P・・・著者のエッセー的思い。(ただ、<自閉>もまたあり、とのわたしの思いも―ドナ・ウイリアムズの世界)

◇脳死・臓器移植を根底から考える(対論 永井明)

医者辞めて医療問題を論じる永井さんとの対論です。

永井―輸血や胎児というところからの「臓器移植と非自己」の問題のとらえ返しを、「免疫抑制剤の必要」という違いからとらえる 57P

永井―感染症と抗生物質のせめぎ合い→揺り返しとしてのエイズ・院内感染 57P

小松―移植推進派の小柳仁(東京女子医大)「日本で移植が可能になれば、毎年ジャンボジェット一杯分の心臓病患者が救われる」発言―移植医の心性 59P・・・ひとの物化の極

小松―移植コーディネーターの中立幻想、これをマスコミがとりあげない 64P

小松―「脳死・臓器移植にかぎらず、既成事実マスコミが弱い」 67P

永井―「専門家集団としての医者というものが問題提起能力も自浄作用も失っている」 69P

永井―「僕の経験からは医学部教授という人種が言う「患者のために」という言葉は、ほとんど信じられない。そういう人が医局という伏魔殿で生き残っていくということです。」「六〇年代後半に若い医師達が指摘した医学部の問題点は、・・・(中略)・・・しかし実際にはほとんど何も変わっていない。そういう土壌の上で今度の臓器移植も行われたわけです。」71P

永井―「人類という種は衰亡に向かっている。種としての活力を失ってきているという感じがしてなりません。その端的な現れが、生命体存続の入り口と出口を積極的にいじり

始めたということです。」 74P

永井「まあ、僕の場合、考えることは言いますが、決めるのは世間だからしょうがないと思っちゃうんです。ただ、世間の人々が移植を選択するのなら、人類にとって臓器移植というのは素晴らしいということ、本当に納得したうえで、そうしていただきたい。そして、後になって「こんなはずじゃなかった」と思ったときに、素直に「間違っただころで間違っただころだろうと思っていただきたいんです。」 74-5P・・・「世間」まかせのことなかれ主義、それで何が進んできたのか、実際に多くのひとが犠牲になっていくこと、なってきたのかの歴史をとらえかえす必要。

↑

小松「僕はいま永井さんのおっしゃった「世間」というのが気に入らないのですがね(笑)・・・」 75P

小松「死も技術によって操作されていますが、現場では残された者の悲しみだとか安堵感だとか方針状態だとか、そういう気持ちをともなって残された者と死んだ者との関係のもとに成立している死があるということを忘れないようにしなければならない。」 75P

小松「最初から負けるのは分かっているのですけれども、・・・」 76P・・・？

◇生命科学と医学倫理(対論 小俣和一郎)

小俣和一郎さんは医者で、その立場での倫理をとらえようとしているひとです。

小松「プレッソの夢」(出生前に人間を淘汰する)の現実化 81P

小松「過去の優生学と現在の優生学の違い—個人の「自己決定権」に根ざしている 82P

小松「優生政策や法律には「本人同意」≡「自己決定権」がもりこまれていた・・・」

84P

小松「自己決定権」の問題点①勝手主義になる②知識の差で「専門家」の誘導になる③優生政策を免れ得るものにはならない 86P

小松—ラザロ徴候 88P

小俣「和田移植には、戦後日本における一種の体質というのが関係している」(←七三一部隊の免責など)「七三一体質」①パターナリズム②官僚体質③大学医学部における軍隊組織体質 89-90P

小松「医師が権力者になっても、患者が権力者になっても、どちらもまずい。」 92P・・・「患者が権力者になっても」・・・？クレイマー&お客様

小松—コーレマンスさんの安楽死の要求のとりさげ←孫娘の率直な提起 97P←小俣—「誤まてる自己決定」への反旗 98P

小松—臨床現場におけるコミュニケーションと相互批判の必要性 101P

小俣—「インフォームド・コンセントや告知などは一方通行であってはいけない」—うそや隠蔽は疑心暗鬼を生み出す 101P

第2部 私たちの死は「自己決定権」で守れるのか

◇人の死はいかにして成立するか(対論 宮崎哲弥)

この対論は、認識論—哲学的に掘り下げた議論になっていて、興味深く読めました。ただ、宮崎さんの論攷は実存主義的になっているところで、ズレは感じているのですが。この議論は、まるで「空中戦」のようなのですが、実は、哲学の根底的焦点になるはずであ

ろう、実体主義とその批判が焦点になっているのだとわたしは理解しています。これを小松さんは押さえて議論をしているのですが、相手にどこまで伝わっているのか、議論のむずかしさです。

かなり、わたしなりのとらえ返しも入れてメモしているので、できたら本文にあたってください。

宮崎—「私は死にゆく者の实在論を認めることはできません」、「本来の自分」の設定は「宗教」的理念の正当化、「そういう先験性をどこまでも拒絶し、人生をこの現世のみと捉えたとき、初めて人は家族や社会に、あるいは世界に真摯にコミットでき、言葉に責任をもてると思うのです。」106P・・・第3部との関係や対話、鼎談などをすると、いろいろ、問題をほりさげ面白い議論になるのではと思ってしまいました。

宮崎—「個人閉塞した死」は、死の、死を巡る人間関係の物化のプロセスから生まれたということですね。これは近代社会科学—なかならず近代経済学—が見出した利己的個人という概念に照応すると思われまます。」108P

小松—「近代において、一人ひとりの個人は、それぞれ特有な顔、固有の生活、あるいはさまざまな差違があるにもかかわらず、商品交換者と一律に規定されて、初めて独立で自由で平等な存在ということになったのと同様の事態だと思います。」108P

小松—臓器移植の問題点①階層化②医学的に一元化・平板化③臓器・人体の資源化・モノ化 110P

小松—安楽死の論理におけるねじれ、「尊厳のない苦痛に満ちた生」に対置されるのは「尊厳のある安楽な生」 113P

小松—死の短絡の背景①緩和医療の貧困②「家族関係」から社会関係の問題 113P

小松—「自己決定」の問題性①コミュニケーションがなく直接本人の決意に行く②「自己決定の能力のない」とされるひとたちの問題 114P

小松—医療費削減→環境の悪化→慈悲殺という構図 115P

宮崎—「死は自己決定の対象適格に欠ける」 116P

↓

小松—「生の向こう側にあるはずの死を否定することになる」「自己決定を権利として祭り上げるといったところに問題がある」 117P

↓

宮崎—「一般的権利として制度化、法律化されることが問題」 117P

小松—「共鳴する死」というのは、いかに生きていくかという“思想”であって、「死」という言葉が使われていますが、実は生の問題なのです。それに対して国家によるそれは死に向かうもの（「共同体閉塞した死」・・・引用者挿入）であって、方向性がまったく逆なのです。／近代は個人主義と共同主義という二本の足で支えられている。共同体というのは、たとえば、国家、社会、あるいは村落がそうだろうし、家族もそれに数えられる。」118P
・・・共同幻想としての国家、社会、共同体と共同性を区別していく

宮崎—「個から国家へ向かうとされる同心円」批判、個が直接国家に包摂されていく、「近代の基本シェーマは「国家と個人」の相互依拠」。しかし、国家は抽象的機能体（共同幻想）、だからマスメディアと学校で包摂する機能を作る 119P・・・？近代的個我の論理へのとら

われ

宮崎—実在の共同体は「家族」119P・・・これにも幻想がつきまとう、近代家族の分析の必要性

小松—「もともと共同体の存在を前提にして、そこから具体的問題を考えていくのか。それとも私の場合のように、まず個人的相互関係から広げていくと、それがやがて共同体と呼ばれるものになっていくのか。その方向の差は決定的違いのように思えます。」120P・・・共同体というところでの実体主義への陥穽、共同性というところで押さえうるのでは？

宮崎—「私は「共鳴する生」の宿る場所が、共同体ではないかと思うのです。」120P

宮崎—「共同体の実在を前提にしているのではないのですが、個が存立する初期条件であると考えています。たとえば、人は家族の中に生まれ落ちるのであり、生まれ落ちてからの環境が家族に「成る」わけでもないように思いますが。また所属する家族や地域をもたない人といえども、やはりなにがしらの家族的、地域的な、共同性の中に住まっています。あるいは、かつての共同性の記憶を「自我」の宿る辺としているのです。こうした共同性をも否定する人間観こそが「負荷なき自我」論と呼ばれるものです。」121P・・・「共同体」「個」「家族」の実体化、「共同性」と「共同体」のすりかえ、区別を付けていない。「共同体」を実体主義批判として押さえ直す必要。

小松—「私の場合には、仮に共同体という語を用いるなら、共鳴関係が成り立っているときに、とりあえずそれを「共同体」と呼ぶことになります。私が「共同体」とか「共同体的」という言葉を避けるのは、実体としての近代的共同体とか、中性的な共同体と私のいう共鳴関係（態）が混同されるといけないと思っているからです。」121P・・・実体主義批判の立場性

宮崎—「そこで小松さんのおっしゃる個人とは、ア・ブリオリな実体なのですか。」122P

↓

小松—「いや、生活過程の中で振り返って見たら個人が存在する、ということです。」122P

小松—「今までの近代的世界観・人間観では、最初に共同体から始めるか、あるいはそれとは対極にある個人から始めるか、いずれにせよ結局はそれ自体を裸の独立自存体として想定し、理論づけている。私は死の問題を契機にして、個人と「共同体」が同時に生起するものとして考えつつあります。」122P・・・網と網の目

宮崎—「“裂開”」、ジャン・リュック「無為の共同体」モーリス・ブランショ「共同体なき共同体」←小松—木前利秋「“悲哀”の過去と現在」123P

宮崎—選択不可能な外部条件が現存する—人生の初発に設定される家族関係と母語123P

↓

小松—変革可能性は？・・・宮崎さんの答え？

宮崎—「私は生命至上主義者ではないのですが、・・・そこで個体間接触の場、フェイス・トゥ・フェイスの交わりを温めあう場としての共同体の維持、発展が求められているのだと思います。」124P・・・この「共同体」は結局、幻想共同体になってしまっているのではないのでしょうか？

◇「死の自己決定権」を通して医療を見る(対論 市野川容孝)

市野川さんは、優生思想関係の研究をしていて、雑誌でその関係での特集が組まれたときには必ずといっていいほど文を寄せているひとです。ですから、雑誌でいくつかの文を読み、特に社会学関係の論攷や文献の紹介をしてもらっていて、社会学の基礎学習を踏まえていないわたしの立場で、一度、きちんと読んで置かなくてはと市野川さんの本も買っているのですが、未だに読書を果たせずにあります。知識としては得ることがあるにしても、何か掘り下げられていないという思いがあるのです。実は、障害学会が立ち上がる前に、障害学研究会ということがあり、その中で、学者のひとたちが順に担当して講演会をやっているときに、市野川さんも担当したときがありました。そのとき、丁度、イギリスの「障害の社会モデル」の第一世代への批判が日本にも入ってきているという背景があったというとき（わたしはまだそのあたりの事情は知りませんでした）、「障害の否定性は、百メートル走で少しでも早く走りたいという思いがみんなにあり、そのようなところから来ているのではないか」と市野川さんが話をしたので、わたしは「それは、小学校の時に運動会で徒競走ということがあり、生物学的にいう「刷り込み」のようなことが起きたからではないか」という問いかけをしました。そのあたりのことは、モンゴルの遊牧民なら「馬を早く駆けさせたい」とかなるだろうし、セパタクロウとかガバディとか、知らないスポーツを巧くなりたいたいとか日本ではほとんどのひとが思わないし、剣玉をみんなが巧くなりたいたかうわけではない・・・という論攷とかにもつなげているのですが、ともかく、市野川さんには固定観念へのとらわれのようなことを感じていたし、ここでは、そもそも自己とは何か、自我とか何かという認識論的な論考が感じられないのです。先に書いたように、いろいろな紹介などは吸収させてもらっているし、真面目に読み込まなくてはとの思いもっているのですが。

小松— (ジョルジュ・カギレム)「すべての医師は、医学において人は震えながら実験をするということ、つまり震えながら治療をするということを自らに言い聞かせ、かつ他の人々にそう知らせねばならない 135P

市野川—「われわれは常に他者を透明で見ているわけではない。われわれの側の先入観をもって他者を見ているわけです。そういう先入観を突き崩して他者を発見していくときに、他者の自己決定を尊重するという配慮は必要だし、その意味でなら宮台さんの主張も頷けます。」 138P・・・どうやって突き崩すのか、そこにおける思想性の問題。自己決定を巡る立ち位置は、宮台さんと小松さんの間に市野川さんは位置してしまっているのでは？

市野川—「逆にいえば彼女たちは、生まれたときからこういう状況に置かれている人たちをこれまで認めてこなかっただろうと思うんです。そういう自分の他者に対する態度が、逆に今の自分を否定する形ではたらいってしまう。」 140P

小松—「脳死・臓器移植とは、現代の医療現場からの特攻兵士にほかなりません。」 143P

◇自己決定権・共同体・死(対論 笠井潔)

笠井さんについては、野間易道さんとの共著の本の紹介の『図書新聞』での記事を読書メモ 351 で書き、後で読書メモ 358 で、その本の読書メモも残しました。笠井さんは昔新左翼の活動家だったのですが、「左翼なき革命論」という論理矛盾の中にあるのではないかとわたしサイドではとらえ返しています。どうして、こういうひとと対論をすることになったのか不思議なのですが、この対論の中で、もっとも対立する意見の応酬になっていま

す。笠井さんは、「自己決定権」と国家の「個人の自己決定権の尊重」というところでなしてくる優生思想的な政策が重なるところで、ファシズムが湧きあがってくるという構図をとらえていないのではと感じています。

小松—「まず原理的なことについてですが、死と死亡を分けます。」「死亡は、・・・「点的な判断です。」 149P・・・「死亡は医学的な点的判断」——死は関係性の中でとらえ返す概念

笠井—「やはり死というのは持続的な自己統覚意識の喪失というのが大きな基準」 150P・・・パーソン論になる

笠井—「近代的な「私」などには内実はないのですが、その建前を一応相互に尊重するという以外に歯止めになるものは他にはない」 151P・・・結局「近代的個我の論理」による自己決定権の尊重になってしまう。「歯止め」は新しい関係性の構築—脱左翼宣言をした笠井さんにはない

小松—「僕の主張の一番の問題点だと思っているのは、死と死亡との存在論的關係がつけられていないということです。」 153P・・・？すでにでているのでは？

笠井—「死は共鳴する」といいすぎるとハイデッガーのはまった罫に落ちる危険性がある。」 154P

↓

小松—「ですから、自己弁明的に僕の本の最後の方に、「共鳴する死の枠組みを上げていくと、国家にまでいってしまう危険性がある」と書いた。」 154P・・・共同体と共同性を区別すること、「共同性において死は共鳴する」とたてること。

笠井—「その人間の権利要求に対して第三者はどのように答えるべきかという問題をたてれば、「分かりました。そうしましょう」ということが妥当だとどうしても思います。」 154P・・・近代的個我の論理による共同性の否定、脳死・臓器移植の容認の論理

笠井—「私は私である」ということはフィクションであり、事実として物があるように「私がある」わけではない。しかし、それを何らかの形で、あたかも在るかのように虚構化しないと成立しない。」 156P・・・「成立しない」のは資本主義社会、「資本主義社会」の擁護論

小松—「あくまでも個人というものをどんどん祭り上げて、大文字の個人なり自己決定権にまで高めて、そこから演繹的に一つの問題に下降してくるというのは、笠井さんが批判されているナチズムとスターリニズムという、二つの全体主義と同じになる可能性があるのではないか。」 158P・・・下降？ 演繹論は上向法では？

笠井—（優生手術にかんするところで）「僕はそれは社会的に決定されると思う。」 160P・・・国家が決めるのではなく、社会が決めるという論理、しかし、社会と国家の関係を押さえていない

小松—「仮に強制という言葉を使わなくても、実際に社会への浸透力をもつてしまう。」 165P・・・社会にある優生思想・競争原理・近代的個我の論理との言説の「共振」拡散

笠井—「まず一般的にいうと、ナチス的優生政策を唱えること自体を政治権力が禁止することはできないということが一つ。次に僕個人のことについていうと、優生学的発想にはなりません。優生学である以上は、個人の意識だけでなく個人の存在も含んだ恣意性を

何らかの形で統制しようという発想が前提にあるが、そのような前提を僕は拒否している。」166P・・・殺人教唆を禁止できないのでしょうか？ 優生学や思想は統制や強制だけでなく、ソフトなところから浸透していく、「障害はないにこしたことがない」とか、競争原理とか、労働能力とか、だから市場原理も含めて批判してく必要（わたしの立岩さん批判）。

小松―「制度的な強制へ向かっていく優生思想が個人の自己決定権を前面に掲げるところから始まってきた歴史的事実のことです。」167P・・・優生思想と自己決定権のつながりは、「ぼっくり死にたい」ということのひろがりの中に見いだせるのでは？ 「青い芝」の内なる優生思想批判

小松―「そもそもパターナリズムか個人主義かという二元的な発想を問題視しているのです。」180P

◇自己決定権から共鳴へ―フェミニストからの批判に答えて(小松美彦)

この話は、読書メモ 518 の利光恵子さんの本で、一応対立の構図は解けているのではとも思えます。そこには、筆者の「自己決定権は幻想である」という観点からのとらえかえしもあるのだと思います。

「自己決定と自己決定権とは弁別すべきだと思います。」「日常生活の中で他者との関係で不断に自己決定している」「自己決定権という他者排除の理念」183P

「共鳴する死とは人は死んではならないという願いを大原則とする」186P

「現在そうであるように自己決定権を原理とするのではなく、「国家には出産・中絶に介入する権利はない」といった類いの条文を盛り込み、既存の状態の解除・解体を図るべきです。」190P

第3部 死の共同性をどう評価するのか

◇「死者との連帯」へ(対論 福島泰樹)

福島さんは仏教の住職、「短歌の絶叫コンサート」とかもやっていて、かなり破天荒なひとで、日本では、西洋文明を希求する面があるのですが、むしろ東洋思想のとらえ返しの面白さを感じさせる対論になっています。わたしとしては、廣松さんの対論『仏教と事的世界観』を想起していました。

小松―「エンバルミング」（遺体切開して防腐剤を挿入して身体の内部から痛まないようにする技術）が広がっている 205P

小松―「個人主義的な死と共同体主義的な死はセットで成り立っていて、その意味で死者まで蹂躪され、支配される方向へ向かっています。」←（小松さんは関係主義）「関係主義にはそもそも枠組みがない。「死者との連帯」が波紋のように広がる可能性がそこにはあるんです。」212-3P

小松―「死は共鳴する」―「ひとは二度死ぬ」の内容 216P

福島―利他行 224P

福島―（中井）人は死んだら人の心の中にゆくんだ 226P

小松―「完全な死体になる」230P(←胎児の死―ひとの生誕)

福島―利他行というごまかし 232P

◇「死の義務」と「内発的義務」(対論 最首悟)

最首さんは、実はわたしの本を世界書院から出してもらった時に、その社長が編集長をやっている雑誌『情況』で、「障害者解放運動の今」という特集を組んでもらい、最首さんにわたしの本のコメントをもらっています。その前に読書メモで最首さんの『星子が居る一言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』を取り上げていたのですが、余りにもラジカルな批判を書いてしまい。親ということで、「身内意識」が働き、しかもその上に前述のコメントをもらったので、唯一お蔵入りしているメモにしています。最首さんは東大全共闘を担ったひとりで、そこでの運動の行き詰まりの総括で悶々としているときに、「障害者」の娘が生まれ、問題をスライドさせて、総括の作業を放り投げ、論考を掘り下げていくこともなしえていなのではとの思いをもってしまっています。この対論でも、問題の掘り下げをなそうとしないところが、垣間見えるのです。

小松—キヴォーキアン「死刑囚の遺体の活用 etc」とハードウィック「死の義務」237-9P
最首—義務ということの歴史的社会的違い 240P・・・運命論的になっているのでは

小松—ヘヤー・インディアンやアボリニジや姥捨て山の話からする「死の義務」のような話、「そうした援用は、現実の当該問題への肉薄を遮り、それを仕方がないものとしてかたづけける方向に機能しがちです。」243P・・・社会的歴史的極限の援用は、それも関係性の中で起きてきていることで、そのことの分析なしに一般化する運命論になっています。

小松—予算の話「森を見せることは、木を見せないことなのです。」247P・・・そもそも社会構造を固定的にとらえて、予算がないとしているだけ。

最首—「もし、社会に余裕がなくなったら、星子を抹殺するのは、たぶん、僕だろうと思う。」248P・・・昔、社会に余裕がないときに「障害者」が殺されたのは差別ではないと書いた「障害者」当事者がいたけれど、その時代の当事者意識（フェア・ウンス）としてそうであっても、第三者意識としては差別そのもの。だいたい青い芝の親の「障害者」殺しを告発してきた運動をどうとらえていたのでしょうか？ そもそも「障害の否定性」がどこからきているのかというとらえ返しをしていない。

最首—「しかし現実には社会に、その力はない。結局、「できるだけ多くの人が生きられるように」したいという思いは、感じたか、機械化の中では実現しないという地点に私たちはいる、それは事実だということだけ言いたいことです。」251P・・・客観主義的に語ることを止めたところに運動があつたのではないのでしょうか？ 余裕がないというのは、二つ、①考える余裕がない—実は考えないようにしているだけ②お金がない—大嘘（総括をなしえぬままに、問題をずらしたところで）社会を変えようというところの意志の欠落

小松—「人は死んでならない」というのは、本人にというよりもむしろ、「そうした人々を取り巻く人々に対して向けられているんです。」253P

小松—「ところがそれが逆転してしまって、「人は死んでもいい」ということが、いとも簡単に掲げられてきている。それは結局上のほうからであるにもかかわらず、「死の自己決定権」や「死の義務」などの美辞麗句によって、自発的なものに思い込まされてしまっている。」254P

最首—「重さが足りない」255P・・・小松さんは自分の責任の範囲で話をしているだけ。意味不明。自分の引き写しをしようとしているのでは？

最首—「極端に弱いものにすぎているかぎり、すぎり甲斐がないわけだから、自分が強くなることはない。」264P・・・そもそも「すぎる」という発想が分からない。「弱い」とされていること自体を問題にすることなのに、意志をなくして「すぎる」生き方をしているひとにはそれがない。「星子」を「護符」(誰かの言)にしているのでは？

小松—「最首さんが今おっしゃった、権利や義務を個人の中に入れ込まずに場として考えたい・・・」266P・・・場の理論、関係論的観点からの小松さんの読み込み。ただ、権利とか義務という概念のとらえ返しも必要

小松—「関係性からくるのであって、制度の問題ではない・・・」267P・・・関係性≡制度ということでは？

最首—「勝負してもあまり甲斐はないんじゃないか。」269P・・・なぜ、議論をするのか、理論に関わるのか？

小松—「最首さんの、書き手としての主語である「私」がまずないんですよ。」273P
◇キリスト教思想にとっての生と死(対論 土井健司)

わたしはカトリックの幼児洗礼を受け、キリスト教の教えに子どもの時にさらされていたので、その矛盾のようなこと、この対論でも小松さんが感じていることに同調すること多々ありました。

小松—「生身の関係性を最重視する姿勢・・・」277P・・・隣人愛の話に繋がっていく

土井—「憐れ」の語源は「はらわたがちぎれるような痛みを覚える」ということにつながる 281P

小松—「具体的場面で目の前の人に対して、内臓がちぎれるような思いが自然に湧き上がってくること、それが隣人愛なんですね。」281P

土井—移植コーディネーターが介在することによって「憐れ」が働かない構図 281P

土井—「移植に必要なものは愛でなく、臓器であるわけです」282P・・・愛という名のごまかし

土井—「善意」と「隣人愛」283P←小松—一般・抽象と個別・具体

土井—「個別的なものが一般的になっていくプロセス」—「すべき」になった愛他精神は隣人愛ではない(小松さんとの対話の中で) 284-5P

小松—「生命の尊厳の捉え返しなり、隣人愛の捉え直しということも、結局は資本主義批判、貨幣経済批判、数量還元主義批判であり、ひいては近代合理主義批判になっていきますよね。」290-1P

小松—「巧妙に誘導したのが「脳死」という“秀逸”な命名」292P・・・「脳不全」という言い方になるところを言い換えていること

土井—「「ある」「ない」という形での議論の対象になるになる神は、もはや神でない」302P・・・しかし、そもそも神があるという証明はない 神は自然の物神化

小松—「第三者がなかなか口出しできないというのは、気持ちとして十二分に分かるのですが、問題は紅茶を飲むか烏龍茶を飲むかといった選択でなく死の選択であって、しかも、その誰かが死んでしまう前にかたらなければならない。」306P・・・他者一般を規定する法律の問題として議論になっていること

小松—「死の苦渋を代行し緩和するように機能している宗教や神もまた、それらがその

ように機能する以上、個人個人の関係性を薄めているのではないのか」308P・・・そもそも架空の話として進むこと、そこに入り込めるのかという問題があり、そして少なくとも「この世」の問題の解決の道にはならない

◇エピローグ 母から教えられた死(小松美彦)

お母さんの他者への「死への共鳴」ということでのエピローグです。小松さんの「共鳴しえる感性」のようなこと、実はお母さんから来ているのだと感じていました。わたしはむしろキリスト教的欺瞞の世界を反面教師的に理論・思想を練り上げようとしているのですが、深層心理的などころの自らの保守性や差別性におそれおののいています。

「死者との連帯」312Pということも出て来ます。

さて、「人は死んではならない」の提言に対して、わたしは基本的に共鳴しつつ、違和とかズレのようなことも感じていました。「死んではならない」ということばは、「死んで生きる」というところで、死を賭して運動を担うという側面をどうするのか、という問題があります。そこに「死者との連帯」ということがあるはずなのです。

生きた結果、生きようとした結果として死ぬ、死に様（これは実は生き様ですが）さらして死ぬというときに、それは必ずしも「死の否定性」にはならない。それは、「ひとは二度死ぬ」ということばがあります。60年安保のとき警察に殺された樺美智子さんは、同時代を生きたひとたち、そして少なくとも、70年世代のひとたちの中で生き続けています。そして、歴史に名を刻んだひとは生き続けるのではとの思いも持っています。

この対論を読みながら、わたしとしては、「関係性の総体」という概念が浮かび上がっていました。共同体のための死ということは、幻想としての共同体に誘われるのですが、そうでない関係、共同性というところでの生と死ということを考えていました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 522

・『情況 2019年 07月号 [雑誌]特集 政治とは経済なのである』情況出版 2019

最近、「反緊縮」というところでの経済理論が出て来ています。異端としてとらえられていたようなのですが、あちこちで目にするようになってきました。で、雑誌で特集を組んでいたもので、一応押さえておきたいと、特集をだいたい読みました。今回のメモは、読書メモというよりは、そこからかなり離れたこの理論に対するわたしの対話です。

資本主義社会の法律概念では、「基本人権」ということがあり、これはお金がないということで「基本的人権」に関わることにお金出さないとか、削減することはあってはならないはずで、だからこそ、「基本的人権」というのだと思います。こういう意味での「反緊縮」ということには大賛成です。

「緊縮」といえば、小泉構造改革を想起します。ここでは、「聖域なき構造改革」で、福祉削減にまで手を出しました。安倍政治では真逆のアベノミクスなる経済成長戦略を出したのですが、福祉に関する事だけは、切り捨て、削減、頭打ちを続けています。真っ先にやったのが最後のセフティネットと言われる「生活保護の見直し」でした。一方で、「異次元の金融緩和策」をやり、福祉は切り詰めるという、まさに、お金持ち・大企業優先政

策をやっているのです。こういうアンビバレントな政治であるということを押さえねばなりません。もちろん、「反緊縮」ということで想起され反発されるのは、かつての「土建国家」と言われたような公共事業への、まさに企業のための事業を企画し、一度お金が付くと(後でいろいろ問題点がはっきりしてきても)止まらないというようなことをやってきたわけで、それが長く自民党政治を支えてきたという側面がありました。アベノミクスの「金融緩和政策」でも、結局、トリクルダウンとか言いつつ、いろいろ操作したあげく、実質賃金はあがらず、大企業が内部留保を貯めたという事に収束しています。

アベノミクス効果などということを言っていますが、財政出動をすればそれなりに経済が上向くのは当たり前で、逆にいうと、それだけ出動したのに、効果がほとんど上がっていないのです。雇用率が上がったという話をしていますが、それは専業主婦ということが一部お金持ち以外にありえず、子育て支援をしてこなかった結果少子高齢化をもたらし、若年層の労働者が減り、高齢者になっても仕事を続けざるをえなくなっているという総体的相対的貧困状況が生み出されている結果としかわたしには思えません。

小泉構造改革で財政赤字削減と謳っていたのはアベ政権でどうなったのか、危機の先送り蓄積というようにしかわたしにはとらえられないのです。この特集で軸にしている MMT 理論は、危機—デフォルト(債務不履行)は起こらないとしているのですが、その論拠がきちんと出されているとは思えないのです。

デフレが続いているということ、すなわち経済成長がないということを経済の根源のように言うひとがいるのですが、そもそもグローバルゼーションが行き渡った世界において、それでも資本は飽くなき利潤を追い求める、そして経済成長を求めることなしに資本主義は維持できないという根底的矛盾に陥っているわけで、デフレが続いているというのは、持続可能な資本主義体制という側面から出て来ているのではないのでしょうか？ 議員立法である悪法—「障害者支援法」を作るときに掲げられたのは、「持続可能な福祉制度」でした。で、アベノミクスで経済成長戦略が掲げられたのですから、「持続可能な福祉制度」から「必要な支援をなしえる福祉制度」に変わるべきところ、こと福祉に関する事だけは「持続可能な福祉制度」どころか、あらゆる領域で切り捨て・切り詰めが続いていくという状態です。新グローバルゼーションのキーワードである「自己決定」・「自己責任」の名の元に、「労働能力」がないとされるひとたちへの「死への誘導」さえ始まっています。

どうも金を刷ってばらまくなり、国債を発行してお金をばらまけば、経済成長するような幻想をもっている「経済学の専門家」といわれるひとがいるようなのですが、商品が売れないなら企業は商品を作らないし、設備投資もしないのです。だから、企業は内部留保をため込んでいくのです。グローバルゼーションの時代には、経済成長を求めると、格差の拡大という方向に進むしかないという問題もあるのです。

こんなことを考えながら、この特集を読んでいました。

この特集のメイン論文は二つ、ひとつは、薔薇マークキャンペーンをやっている松尾匡さんの「薔薇マークキャンペーンと安倍政権を倒す経済政策」と石塚良次さんの「異端の経済学 MMT を読み解く—現代資本主義と貨幣理論—金融緩和論の陥穽」です。松尾さんは消費税増税反対の論拠で使おうというところで、注目されているようです。ただ、政治—選挙分析をすべて経済政策分析でなしえるわけではないということや、講演録というこ

ともあるのですが、およそ、これまでの経済理論との対話がきちんとなしえていず、粗い議論にしかなくなっているのではという思いがあります。経済が破綻すると台頭するのは極右だとかいう話を書いています、左翼もでてくるのです。このひとは、資本主義が永遠続くこととして理論をたてて、その中で経済政策論理をしています。フランスの極右ルペンが福祉政策を立てているという話を書いています、それはヒットラーが国家社会主義労働者党と労働者の立場を出していたことと同じ構図です。そもそも、どんどん財政支出してもいいんだということは、エネルギーの永久機関などないことと同じで、どう考えてもありえません。たぶん、デフレの間はどんどん財政支出してもいいんだという主旨なのでしょうが、デフレからインフレに移行する潮目ということがつかめえるのでしょうか？資本主義社会は株式ということがあり、その操作で金儲けをしようというファンドがあり、そこで急激に金を動かすのです。そのひとたちがいかに経済を安定させることに貢献するか、という倫理など求めようもないのです。だから、恐慌とか起きるのです。

石塚さんの論文は、マルクス派貨幣論の深化という内容をもっているようで(「内生的貨幣理論」ということがキーワードになっているようです)、現在の資本主義の貨幣理論、そこから経済学的分析を深化していく必要を感じていました。マルクスの理論は原理論的な理論で、そこからこまかいところへもっと下降していくことも必要なのだと思います。たぶん、ここで問題になっているのは、ケインズ理論との対話です。ただし、イギリスの「ゆりかごから墓場まで」という福祉政策がグローバル化にのみこまれていったことや、北欧の福祉国家的なところでのブレとか、スウェーデンで優生手術がおこなわれていたことや、福祉の先進国といわれるところが安楽死・尊厳死が広がっていつていることをとらえると、これは結局近代合理主義の突き詰めの範囲の福祉政策で、わたしはケインズ理論は破綻しているのではとったりしています。(反緊縮派を支える理論として、これは松尾理論の紹介のようですが①MMT(近代貨幣理論という訳も出ています)②ニューケイジリアン③信用創造廃止・ヘリコプターマネー理論とあげています。(これは「註1」の中に書かれています。) 58P

さて、この特集でひとつだけ読み切れなかった。塚本恭章「いま読んでおきたい経済・経済学の本 55 冊」があります。膨大な文献があげられています。いろいろなことに手を出しているわたしにはとても、こちらの方に踏み込めません。それで、この分野にはコメントしないとすることなのですが、それでも、一応表面的でも少しはマルクス経済学の流れをかじった立場からあえてコメントを試みました。

そもそも、問題の焦点は、現在的に「反緊縮」といつているひとたちは、財政破綻する可能性にきちんと向き合っていないということです。そもそも、所得税の累進課税の軽減とか法人税減税がどういう論理からでてきていて、それをどう批判していくのかということがまったく出て来ません。国際競争力というところが出させていたのです。そもそも、企業が多国籍化しているときに、資本が海外に出ていくことを止められないのですが、タックス・ヘブンとかも含めて規制の方法を考えることもあるのですが、お金もち・大企業のための政権はそもそもそんなことはやりません。そこで、国際競争力が落ちるとして、しわ寄せを、中間層の下層への没落、下層のひとたちへの福祉を削り、弱い人たちにますます生きづらい社会をつくっていきます。だから、一般民衆にとって、ますます生きづら

くなり、資本主義の矛盾はますます拡大していきます。だから、資本主義を止めようよと突き出すことなのに、どうしたら資本主義を救えるかという話をマルクス派だったはずの経済学者まで、そのことに飲み込まれているのです。そして、左翼のはずのひとたちも、そこに飲み込まれている現状があるのです。

もうひとつ、書き足しておきますが、障害学でもベーシックインカムの話がでてきているのですが、これは、そもそも、基本生活保障の話につづけていくことなのですが、資本主義経済の枠内でどうするのかということでは論理矛盾に陥っています。構造改革的革命論として出していくのなら、可なのだと思います。

読書メモ的なところで、他の文でも少し書いておくと、「移民問題の最前線 入管という現場から——織田朝日さんインタビュー」が参考になりました。小見出しに「在特会とヘイトの親玉・入管」206Pとありますが、まさに、入管が、排外主義的ナショナリズムの機関として機能している、日本の外交政策の酷さが出て来ているようです。そもそも司法的なこと総体での日本の非民主主義なこともあるのですが、民主党が野党の時代には、入管問題でいろいろ支援をしていたのに、政権をとったら、引いていったという話も出ていました。

その他、いろいろコラム的なことが盛りだくさんで、また特集関係の論攷、特に MMT 理論から「反緊縮」をかかげる山本太郎さんの文も出ていますが、コメントは禁欲しておきます。

もうひとつ、友常勉「書評論『マルクスと商品語』、『資本論』の版によって違いがあること、訳語の問題とか出ていて、細かい学習に踏み込んでいく、筋道をひとつ示してくれています。廣松さんの名も出ていますが、『資本論』を物象化論から読み込んでいくところとの対話はありません。むしろ、「私的労働」という概念がでてくるところとか、実体主義に陥っているのではと感じていました。改めて、廣松学習をしていくなかで、対話する機会があればと思っていました。

とりあえずここまでです。

たわしの読書メモ・・ブログ 523

・A.R.ホックシールド/布施 由紀子訳『壁の向こうの住人たち——アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店 2018

この著者は、「フェミニスト社会学の第一人者」で、リベラルな学者なのですが、南部の共和党支持者がどうして、共和党右派を支持するのかということを探りに、つてを頼ってルイジアナ州レイクチャールズ市を中心とする現地にでかけ、芋ずる式につてを頼り、インタビューや参加観察という手法で、分析をしてなした著書です。丁度、研究をしているときに、トランプの選挙戦が始まっているとき、どうしてトランプ政権が成立し得たのかということの分析にもなり、アメリカの中でもかなりの評価を受けている書なのです。

ルイジアナ州は石油関連施設が作られ、一方では有数の貧困州、アメリカ中央政府から州の予算の 44%の支援が入っているのですが、小さな政府という共和党の支持をしている赤い州(ちなみに民主党の支持の州は青い州と呼ばれています)なのです。そして、石油関連

施設を州政府が誘致して、そこで大規模な地盤沈下、環境汚染が起きているのです。ここでは「がん回廊」と呼ばれるほど、がんが多発しているのです。また遊泳禁止や釣り禁止の立て看板を立てて規制するところなのですが、この規制を住民が嫌い、「がんにならないような魚の調理法」とかいう本末転倒のことが流布していくなどのことが書かれています。これを著者は(環境破壊という)鍵穴から地域社会見るという概念でとらえ返そうとしていて、一部のひとはそこから訴訟とか起こし、自らの右派の地盤を揺るがしてはいるのですが、それでも資本誘致や優遇政策を州政府が進めていて、共和党支持者はそれに乗り、批判がちゃんと起きないのです。それで、福祉を受給する人たちへの批判が「列を乱す者」として出てくるのです。

この本の、キー概念は、ディープ・ストーリーです。この地域には、ケイディアンという、カナダのフランス系ひとたちが、イギリスのカナダ支配の中でカナダを追われて、たどり着いたひとたちがかなりいて、差別の中で生きてきて、アメリカン・ドリームを夢見て生きる、そしてそれなりに地位を得たひとたちが、もっと下層のひとたちが福祉を受けることを批判する差別構造の中で、小さな政府の共和党支持をしていくということがあるのです。また、南北戦争の南部連合の北軍・中央政府への批判もその深層にあるという、論理ではない、感情的なことが表面に出てくる、ディープ・ストーリーなのです。さらに、現実の問題に向き合うことの中で、保守ではないリベラルな思考が出てくるのですが、そこは、キリスト教的なすべてを「神の思し召し」ということや、神の国での幸せを願うというところで、現状改革を回避していく思考が出てくるのです。

著者はこのひとたちのディープ・ストーリーをつかむ中で、そのひとたちの心性をつかみ、リベラルな思想は維持しつつ、その心性をとらえ返しているのです。

さて、この本を読みながら、日本にも同じような事が起きているとの思いを抱きました。たとえば、環境破壊について語らないようにしている共和党支持者は、フクシマにおける放射線被害を語らない中で、保守志向を維持していくこと。福音派のテイベーティと国家神道の日本会議の対比をしていました。「列を乱す者」という批判は、部落解放運動の中での特別処置法への「ねたみ差別」に呼応するヘイト発言にもつながっています。

反差別論をやっているわたしの立場からすると、被差別者が差別に対峙しえず、差別的な心性にとらわれていく状況をさぐる貴重な書です。まさに論理にならない感情的なところで、出口が塞がれていると感じて、そこからあらゆる差別的な心性にとらわれていく構造があるのです。差別されるひとが、さらに差別するひとを探し差別を転化していく構図があります。それは、結局大きな差別の構造の中で、自分自身の不利益にしかならないのですが、それは論理の問題で、感情的なところで差別するひとを探す、いわゆるスケープ・ゴートの差別的な転化の構図がそこにあるのです。そもそも、この書でもあるのですが、差別ということを、きちんと言葉化して、差別の構造そのものに対峙する、分断を超える運動を作り出していくことがいまこそ必要なのです。

この本はおすすめの本です。読む習慣があるひとは、ぜひ、図書館でも探して・リクエストして読んでみてください。

あとは、キーワード的な切り抜きメモの中で、コメントを残します。

「わたしたちは、川の “向こう側” の人に共感すれば明快な分析ができなくなると思ひ込

んでいるが、それは誤りだ。ほんとうは、橋の向こう側に立つてこそ、真に重要な分析に取りかかれるのだ。」 xiP

「共感を阻む壁」 8P

「今では人種より、“愛党心”と呼ばれるもののほうが、対立につながる偏見を生みやすくなっている。」 10P

「大きなパラドックス」 9-25P

ルイジアナ州は多くの苦難にさらされている州、連邦政府の支援も大きいのに、連邦政府（当時は民主党）批判、大きな政府批判の立場 14-15P

青い州—赤い州 16P

「メディケイド[困窮者と身障者を対象とする医療扶助制度]やフードスタンプ[食料購入費の給付制度]を必要とする赤い州の住民たちは、これらの仕組みを歓迎するが、投票には行かない。しかし少し上の階層[マクギリスは一、二段階上としている]にあたる白人保守派はこうした制度を必要とせず、必ず選挙に行く。そして、貧困層のために公的資金を使うことに反対票を投じるのだ。」 16P

「政府のサービスに反対票を投じる当の富裕層が、そのサービスを利用している」 17P

「あるんだから、使わない手はないだろう？」というティパーティー支持者 17P

「マクギリスは、投票者は純粋に自分の利益のためだけに行動するのだと述べている。」

17P・・・？自分の利益をどこに見ているのかということによって違ってくるはず、保守派には言える。

「わたしは本書のテーマの核心に通じる“鍵穴（キーホール・・・原文はルビ）”とも言うべき問題にたどり着いた。それは環境汚染だ。」 18P

「近年右派の台頭が著しい地域は、ほとんどすべてがメイソン＝ディクソン線[一八世紀に植民地間の領有権紛争を解決するために定められた境界線。のちに米国を南北に分かつ境界線になった]以南に位置している。南北戦争時に南部連合に参加した州を含む地域で、米国の人口の三分の一を占める人々がここに暮らしている。」 18P

南部の人口は増え、南部の白人が民主党から共和党支持に移行し、全国的にも白人の共和党支持が増えている。「だから右派を理解したければ、南部の白人を知る必要があると思ったのだ。」 18P

「米国議会下院のティパーティー議員連盟に加入しているルイジアナ州選出議員の数は、サウスカロライナ州に次いで二番目に多い。」 18-9P

「がん回廊」 21P、353P

「どういう経緯そんなこと(企業の利益の論理や富の集中の論理、エリート主義への批判)になるのだろう。頭の回転がよくて、疑問に思うことは必ず確かめ、情報収集を怠らない人でも欺かれるのだろうか。」 22P

(ウッダード)「わたしたちが所属する小集団には、しばしば政治と地理を結び付ける特殊な統治文化が反映される。」 22P——「もちろんウッダードの言うほど流動性を欠いたものではない。」 23P

「右派の倫理観を指摘する見解もある。・・・社会学者のシーダ・スコチポルとヴァネッサ・ウィルアムソンは、それは複数の状況——下地となる要素と、促進する要素——が独

特の形で影響し合って生まれるものだとしている。後者のおもなものは、二〇〇八年の大不況と政府の対策、バラク・オバマ政権、それに FOX ニュースだったという。」 23P

「どの研究もたいへん参考になったが、わたしにはひとつだけ、どの研究にもないものを見つけた。それは、政治における感情というものの理解だ。」 23P・・・わたしは感情を差別的心性というところから読み解こうとしています。

「いまは左派でも右派でも、“感情のルール” が働いている。」 24P

「わたしは、その人にとって真実と感じられる物語——これを“ディープストーリー”とよぶことにする——・・・」 24P

「ディープストーリーはわたしを、「持つべき」感情と「持つべきではない」感情との向き合い方、さらに、人々の心の核にあって、カリスマ的指導者に動かされる感情に、目を開かせてくれた。これからご紹介するように、誰もがディープストーリーを持っているのである。」 25P

「ティーパーティは単に公認された政治集団ではなく、ひとつの文化なのだと気づいた。」

30P

「わたしが話を聞いた人はみんな、クリーンな政府を望んでいた。だがルイジアナでは、大きなパラドックスが真正面からわたしをにらみつけてきた——そこでは、深刻な公害に苦しむ人々が、その公害を撒き散らす張本人を規制することに猛反対していたのだ。」 32P

「マドンナ(ゴスペル歌手のマドンナ・マッシー)はリベラルが自分や祖先に投げつけてくる侮辱の数々を、リンボー(リベラル批判のコメンテーター)が強固な壁となって跳ね返してくれたように感じたのだ。」 36P・・・被差別のディープストーリーが反差別とならず、単なる被害者意識にとどまるところからくる差別へ転化する感情

「ティーパーティの支持者は、三つのルートを通じて、連邦政府きらいになるようだ。ひとつ目は、信仰(彼らは政府が教会を縮小したと感じている)、ふたつ目は、税金への嫌悪感(あまりに高すぎ、累進的すぎると思っている)、そして、三つ目は、これから見ていくように、名誉を失ったショックだ。」 51P・・・公務員と生活保護を受けているひとをスケープ・ゴートにする批判へと向かっていく

「じつは、(「列をみだすひと」を批判している勢力にいる) リーとミス・ボビーは社会保障年金で暮らしていて、・・・」 52P

「右派の人々を強く動かす関心事は、税金、信仰、名誉の三つであるらしい。」 67P・・・プライドということの差別に働く心性をとらえ返す

「みんな、このあたりには“釣り遊泳禁ず” という看板すら立ててほしくないんです」 69P・・・福島で、フクシマの放射線被害が語られなくなっていることに通じる事

「ノスタルジア[望郷、郷愁]」 70P・・・これに非常に強力にとらわれた過去の歴史、それだけ強い思い、ディープストーリー

「町では、いたるところで、環境と自然のどちらを取るかということが話題になっていた。」 73P・・・本来、二者択一になることではないことになるところで、批判に向かわない情況

「構造的忘却[structural amnesia]」 73P・・・ある特定のことを忘れ、別のある特定のことを記憶すること→「社会の成り立ちに関係している」「記憶は、権力による間接的な発言」

74P

「階層の上に行くほど、処罰を免れる確率が高くなり、下に行くほど低くなる。環境規制はそのようにできているらしい。」 75P

「わたしは、見えないものに気づくことにより、自分が見たい状況に深く切り込もうとしていた。それはネガを調べて、写真を理解しようとするのに似ていた。わたしは、人が覚えていることや感心を示すこと、言葉にしたことではなく、彼らが忘れたことや無視していること、口にしないことに焦点を置いた。わたしは自分が“ディープストーリー”と呼ぶ物語へと手を伸ばし、人の意識の中にしまい込まれたものに光をあてようとしていた。」

81P

「健康が損なわれることや人生が台無しにされることなどを問題にしないで「その男性は、働かない者——何ももらう資格のない者——にただで税金をくれてやるのはいやだと感じていたのだった。」 87P・・・さらに、健康を破壊する企業に優遇処置をするのはかまわないというとんでもない考え。

「この亀裂(前のこと)が感情の引火点であることに何度も気づかされることになった。」 88P

「おもに白人男性の好むもの(酒、銃、オートバイのヘルメットなど)については、規制がかなりゆるい。しかし女性や黒人男性に対する規制はもっと厳しい。」 99P

「だがここの人々が規制について腹立たしげに語るときには、中絶クリニックや刑務所のことを思い浮かべているのではないのだ。彼らの頭にあるのは、政府が買えと言っているもの(蛍光電球やLED電球など)のことだ。」 100P

(共和党関係の集会で)「わたしは自由という言葉が頻りに耳にした。車を運転しながら携帯電話で通話をする自由とか、ストロー付きのダイキリをドライブスルーで買う自由とか、装填した銃を携帯して出かける自由といった意味で言及される“自由”だ。しかし、銃暴力や、自動車事故や有毒物質による環境汚染からの“自由”はまったく話題にのぼらなかった。」 103P

「わたしは、汚染浄化を訴える“声なき声”を聞き取ろうとしすぎていて、仕事が第一だとはっきり叫んでいる大きな声を聞いていなかった。」 104P

地元の利益という幻想 106-112P

「おそらく、ルイジアナ州の石油は、保守派が牽引してきた経済成長戦略——社会学者のキャロライン・ヘインリーとマイケル・T・ダグラスが「邪道」の戦略と呼んだもの——の象徴だったのだろう。」 111P

「アメリカでは仕事かきれいな環境か、どちらかひとつしか選べないという考え方——よい仕事に恵まれるかどうか不安に思う右派の無理からぬ気持ちにつけ込むような刷り込み——」 111-2P

「規制の厳しい経済圏ほど、多くの就職口があることがわかったのだ。」 112P

寄付というごまかし 112-3P

「二〇一〇年のデータでは、有毒物質による汚染が深刻な郡に暮らす人ほど、アメリカ人は環境汚染を「心配しすぎている」と考え、国は「十分すぎるほどの」対策をとっていると信じる傾向が顕著だった。」 114P

「わたしが全体像をのぞき見るための鍵穴 (キーホール・・・原文はルビ) としたテーマ

——全国の汚染問題——でも、それが立ち現れた。米国全体のストーリーを見ても、ルイジアナ州は決して変わり種などではなかったのだ。」 115P

「住民にとって望ましくない土地利用」にあまり抵抗を示さない地域を見つけ出す」 116P
→パウエルの描き出した「抵抗する可能性が最も低い住民特性」——・南部か中西部の小さな町に古くから暮らしている。／・学歴は高卒まで。／・カトリック。／・社会問題に関心がなく、直接行動に訴える文化を持たない。／・採鉱、農耕、牧畜に従事(報告書では「天然資源を利用する職業」と呼ばれている)。／・保守的。／・共和党を支持。／・自由主義を擁護。」 116-7P

「彼らを取り囲み、彼らに影響を与えている社会的地勢に、何かほかの方法で身を置いてみる必要があった。そうした地勢を形づくっている要素には、産業、州政府、教会、報道機関が含まれる。」 118P

「そもそもわたしたちは、アメリカ化学協会が約束しているような新しいプラスチックをほんとうに必要としているのだろうか。」 131P

6章——ハーディー・ウエストレイク市長・・・アメリカンドリームのものし上がり、地域ボス

7章——バイユーコーンのシンクホール(陥没穴)

「お金のことしか頭にないのだ。」 155P

「産業が州当局に守られてしかるべきだという文化」 156P・・・住民への援助が嫌いなのに、企業への援助は可という信じられない文化

州のひとつの部局者の文書——汚染されている可能性のある魚の食の規制ではなく、調理法を書いている 157-8P

「お困りのことがあるんですか。慣れてください。」 158P

公務員をスケープゴートの批判しているひとが、公務員の仕事についてのコメント——「わたしだったら、とてもあんなふうには生きられない。」 159P・・・公務員の仕事が大変だという主旨

「市場の自由が完全に保証された世界と、地元のコミュニティとかうまく共存できるものだろうか。」——「ジンダル(州知事)は公共サービスを削減し、環境保護費を減額して、産業びいきの“保護策”をうち姿立てた。州政府は、バイユーコーンの住民を守る機能をまったく果たさなかった。」 159P

「さまざまな側面を探索したわたしは、よい政府のあるべき姿がはっきり見えたと思った。しかしわたしの新しい友人、マイクは、汚染された魚の処理方法を助言したところにより小さい政府のあるべき姿をはっきりと見ていた。」 160P

「社会学者のソースタイン・ヴェブレン[一八五七—一九二九]も、貧困からの距離は名誉につながると述べている。」 162P・・・昔の学者の考え

「社会層には言及せず、黒人のことをできるだけ遠まわしにぼかして話そうという細やかな気遣いはするが、不安をまじえてイスラム教徒の話をするときにはあからさまにずけずけとものを言う。」 163P

「右派の目には、連邦政府が一丸となって、誤った——裏切り者の——側に加勢しているように見えるのだろうか。」 164P・・・裏切り者——後に出てくる「列を乱す者」やリベラ

ル派

「それでも、マドンナの世界観では、財産は警察が守ってくれて、プライドはラッシュ・リンボーが守ってくれ、そのほかのことは神さまがまとめて面倒を見てくれるらしい。」

173P

「でももし、アメリカンドリームとカメのどちらかを選ばなくちゃならないとしたら、むろん、わたしはアメリカンドリームをとるわ。」 173P・・・アメリカンドリームはまだ生きている？ 二者択一の思考？

「米国福音派教会は、アメリカの有権者の四分の一を占めるキリスト教徒三〇〇〇万人の声を代表する。政治的な主張を持った宗教的右派の主導組織だ[特定の宗派ではなく、保守派のプロテスタントによって構成される]。」 174P

「バイスナー(アクトン宗教・自由研究所非常勤研究員、福音派のスポークスマン)は、旧約聖書の創世記第一章第二八節を引用した。「神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて他を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」と。」 175P

「携挙」(——携挙(けいきよ、英語:Rapture)とは、プロテスタントにおけるキリスト教終末論で、未来の主イエス・キリストの再臨において起こると信じられていることである。まず神のすべての聖徒の霊が、復活の体を与えられ、霊と体が結び合わされ、最初のよみがえりを経験し、主と会う。次に地上にあるすべての真のクリスチャンが空中で主と会い、不死の体を与えられ、体のよみがえりを経験する。<ウィキペディア>) 176P・・・これを信じるなら政治的議論はおよそ成立しない

「オートメーションと企業による自社業務の海外移管が進んだことにより、高卒のアメリカ人男性の実質賃金は、一九七〇年に比べて四〇パーセントも減少している。労働者の九〇パーセントに関しては、平均賃金が一九八〇年以降横ばいのままだ。年配の白人男性の多くは希望を失っている。」 178P

「FOX ニュースを家族のように思っている人もいる。」 179P

「そのティパーティーの支持者には、クリスティアン・アーマンプール[CNNの国際特派員を務めるイラン系イギリス人ジャーナリスト]が暗に自分を責めているように感じられたのだ。どんな人を気の毒に思うべきか、リベラルの感情ルールを押し付けようとしている、と。」 182P

「しかもわたしたちは誰もが、自分のディープストーリーを持っているのだ。」 183P・・・深層心理的感情的思い、対話が難しい

「彼らの経済を支配している産業は、明らかに矛盾した物語を提示しているのだ。・・・彼らは犠牲者としての言葉を持たない犠牲者なのだ。」 186-7P

「でもわたしはそうした問題をでっちあげようとしていたわけではない。そこにあったのだ。環境汚染が。健康問題が。そして教育問題と貧困が。」 187P

「すべての根っこは、構造的忘却にあるのかもしれない。」 187P・・・「構造的忘却」という、これもキーワード

「ディープストーリーとは、“あたかもそのように感じられる”物語のことだ。」 191P・・・感情的物語

「わたしは話を聞いた人々の希望、恐怖、プライド、屈辱、怒り、不安を——暗喩として——あぶり出すために、このディープストーリーを描いてみた。」 192P

「列に割り込む人々」 194-7P・・・「ねたみ差別」に通じる

「一九五〇年以降に生まれた人は、そうはいかなかった。それどころか、経済学者のフィリップ・ロングマンが言うように、彼らはアメリカ史上はじめて、生涯にわたって下降移動続けた世代となった。」 200P

左派、「上位一パーセントの最富裕層と残り九九パーセントとの闘いに焦点を置く」 212P

右派、「税金を“払う者”と“奪う者”という文脈で“不当”が語られる。」 213P

「左派の怒りの発火点は、社会階層の上部(最富裕層とその他の層のあいだ)にあるが、右派の場合はもっと下の、中間層と貧困層のあいだにあるわけだ。左派の怒りの矛先は民間セクターに向けられるが、右派の場合は公共セクターである。皮肉なことに、双方とも、まじめに働いたぶんの報酬をきちんともらいたいと、訴えている。」 213P

「彼らにとっては自由市場は、アメリカンドリームに通じる列に並んでいる善良な市民の揺るぎない同盟国であり、連邦政府は、不当に「割り込んでくる」連中に加勢する敵国だったのである。」 213P

「企業が力をつけたことで、労働組合や政府の抵抗も少なくなった。そこで彼らは、誰はばかることなく、最高幹部や大株主に利益を多く還元し、労働者に少なく配分できるようになったのだ。」 213-4P

「皮肉なことに、大手独占企業のために苦境に陥る可能性が最も高い経済セクターは、中小企業なのだ。しかもその多くは、ティパーティーを支持する人々によって経営されている。」 214P・・・利益共同という共同幻想

「この“耐える自分”の表れ方に三つの明確なパターンがあることを発見しつつあった。わたしはそれぞれのタイプを、“ゲームプレイヤー” “信奉者” “カウボーイ”と名付けようと思う。」 220P

「誰もが彼女のように懸命に働くのが、よりよい社会なのだと思っている。」 224P・・・右派の考え

「連邦政府がおもに貧困者救済用として、ルイジアナ州の予算の四四パーセントを負担していることについては、むしろ返してしまいたいくらいだと言う。」 227P・・・右派の考え

「ルイジアナが人間開発指数では五〇州中の四九位、健康全般では五〇位にランクされることと、右派が連邦政府の支援に抵抗を感じることのあいだには、なんの矛盾もないのだ。働かない者は、それなりのランクに甘んじればいいのだから。」 237P・・・右派の考え

「その彼か彼女がね、もし偏見を経験していなければ、もっと楽に成長期を過ごせただろうと言ったときに、わたしは、チャズに自分の生き方を押し付けられたと思ったのよ。」 231P・・・異なる意見の表明を「押しつけられる」と感じる図式

「メーカーはわたしたちが必要とするものを作っている。ソーダのボトルや、ゴム底の靴や、歯磨き粉は必需品よ」 231P——①ほんとうに必要なものなのか②代替え品(方法)はないのか③環境汚染を防いで作る方法はなかったのか(たいていは金儲け主義で、対策をケチったことで起きていること)・・・フクシマのときの電気の話

「人は、アメリカンドリームに向かう次のステップを強く望みすぎてはいけない。」

248P・・・現実的願望をあおりたて、宗教心で抑制する構図

「ひとつの願いをあきらめれば、もっと大きな願いがかなうことに、ジャッキーは気づいた。」 250P・・・そういう場合もあるという話だけ、宗教によるごまかし

「われわれに必要な真の強さは、企業と全知全能の“ドル”に立ち向かうことだ。」 269P
・・・フロンティアスピリッツ的なカウボーイからの転身

三つのディープストーリーの体験 371P

「しかしわたしは、ルイジアナ州南西部に暮らす年配の白人保守層——チームプレイヤー、信奉者、カウボーイ——は紛れもない犠牲者だと思う。」 271P

「環境汚染に対しては、カウボーイのように耐えてはならない、と言いたいようだ。カウボーイのように闘え、と。」 276P

「企業が一般住宅の前庭に、自由にメタンガスを噴出させている状態で、人々にどれほどの自由があるというのだろう。ティパーティーはこの問いにどう答えるだろう。マイクはこの疑問に直面していた。」 277P

環境破壊のすさまじさ——がんの多発 289P

「アメリカの政治文化においては風土的とも言うべき大衆の衝動が高揚し表現される」現象が何度も生まれてきた。ティパーティー運動はそのひとつなのだ。一九世紀、二〇世紀には、政教分離論や現代性、人種統合、専門家文化に抵抗して、さまざまな運動が起こった。しかしティパーティーほど強力に、進歩的改革への反対、連邦政府の排除というふたつの目標を掲げた運動——ディープストーリーを反映した活動——はなかった。」 293P

「年配の白人男性の居場所はどこに残っているだろう。理念としての公正さは、彼らには無縁のものと思われたのだ。」 303P

「しかし——忘れられてはいるが——連邦政府のお金は途切れることなく北部から南部へと流れているのだ。」 306P

「トランプは“感情に訴える候補者”だ。」 319P

「“自国に暮らす異邦人”からの脱出 320P・・・トランプに呼応する保守派の心理 (エミール・デュルケーム)「集合的沸騰」 320P・・・トランプに呼応する保守派の集合心理

「デュルケームの目で見れば、ドナルド・トランプを取り巻いて興奮する集会のほんとうの機能は、「列の前方に割り込む人々」がとんでもないアメリカを作ろうとしていると恐れる福音派の熱心な信徒をひとつにまとめることなのだ。」 320P・・・デュルケームのいう「トーテムの機能」

「わたしは、感情的利益——自国にいながら異邦人であると感じる感覚からの、めくるめく解放感——がきわめて重要であることを発見した。」 324P

「わたしのティパーティー支持派の友人たちは、決して自分たちを“犠牲者”と呼びたがらない。「かわいそうなわたし」にはなりたくないのだ。」 329P

「しかし、左派の人々とあなたがたとのあいだには、意外なほど共通点があるかもしれません。なぜなら、左派の多くもまた、自分の国に暮らしているながら、異邦人であるかのような感覚を味わっているからです。」 334P・・・右派のひとたちに手紙を書くとしたらと想定した手紙の最後の文面、資本主義の矛盾がそもそもの原因だから、次のメモ参照

「左派はと右派は、たがいに異なるディープストーリーを持ち、異なる葛藤に苦しみつつ、それぞれの状況下で自分は不当に扱われていると感じているのだ。左派は民間セクターの最富裕層を形成する一パーセントと、最下層生み出しつつある九九パーセントに目を向ける。リベラルにとっての発火点ここだ。右派は公共セクターを、増加の一途をたどる受け手の“受給者”のサービス窓口だとみている。ロバート・ライシュは、せめぎあいとは別のところにも——小企業が動かしているメインストリート資本主義とグローバル資本主義とのあいだに、自由競争的資本主義と独占資本主義とのあいだに——存在すると述べている。「従来、アメリカの政治にとって重要な断層線は、民主党と共和党のあいだを走っていたが、今後は、エスタブリッシュメント[既得権を持つ上流層]と反エスタブリッシュメントのあいだへと移行するだろう」この線はいずれ「ゲームに不正があるとみる人々と、そう思わない人々とを」分断するだろう。」 335P

「付記 B 政治と環境汚染——TOXMAP からわかったこと」

「その結果、極めて興味深いことがいくつかわかった。相対的危険度の高い郡の住民ほど、「人類の進歩が環境を損なうことについて、人々は心配しすぎている」という設問に同意する傾向が強かった。つまり、環境汚染への曝露量が高い地域ほど、個々の住民がそのことに不安を感じていなかったのだ——そして、「強力に共和党を支持する」と答える傾向が顕著であった」 358P・・・パラドックス

「結局、赤い州のほうが青い州より汚染が深刻だった。投票する、しないにかかわらず、保守派で共和党を支持する人は、環境など問題ではないと一蹴し、その影響に苦しみながら、高レベルの汚染にさらされて暮らす傾向にある。全国で見られるこの政治と環境をめぐるパラドックスが、ルイジアナ州では、極端な形で表れていたのだった。」 358-9P

「付記 C 右派の共通認識を検証する」・・・右派の予断と偏見——12 項目

- ▼ 「政府は福祉[生活保護費を指す]にお金をたくさん使っている」
- ▼ 「福祉給付金の受給者が増えている。受給者は働いていない」
- ▼ 「福祉給付金の受給者は、われわれ納税者の金に全面的に頼って生活している」
- ▼ 「貧しい人はみんな給付金をもらっている」
- ▼ 「黒人女性は白人女性よりもたくさんの子を産む」
- ▼ 「多くの人——四〇パーセントくらい——が連邦政府や州政府で働いている」
- ▼ 「公務員は給料をもらいすぎている」
- ▼ 「環境規制が厳しいほど、雇用は減少する」
- ▼ 「経済的優遇措置を準備し、規制をゆるめないと、石油・ガス産業はどこかよその地域に拠点を移してしまう」
- ▼ 「州が産業に助成金を出すことは、雇用拡大に役立つ」
- ▼ 「石油がほかの分野の経済を刺激する」
- ▼ 「共和党大統領のほうが絶対に経済は良好だ」

メモ、「ファストフード業界で働く人」「保育士」「介護ヘルパー」で給付金受給を受けるひと、いずれも五〇パーセン前後→「“企業助成金”と呼ぶ人もいる。」 361P

「訳者あとがき」

「事実であるかどうかはともかく、本人がこうだと感じている、彼らの人生の物語が浮か

び上がってきたのだ。著者はそれを“ディープストーリー”と名付けた。まじめに働きさえすれば、いつかは自分もアメリカンドリームをかなえられると信じ、辛抱強く列に並んで待っていたのに、現実はそうではなかった。産業のグローバル化、自動化が進んで働き口が減り、勤めていても給料は横ばい。そこへ次々と列の前に割り込む者が現れた……。」

370P

「ページの端々から、人に出会い、つながる喜び、友人たちの思いを届けたいと願う静かな熱意が伝わってくる。著者自身がしなやかに壁を越えてみせているのだ。／考え方は異なっても、共感を阻む壁をはさんで言葉を交わすことはできる。手を取りあうことさえできるかもしれない。希望を捨てずに対話を続けてほしいと、この本は語りかけている。」

371P・・・そんな簡単なことではないことは著者自身がわかっていると思うのですが。

「原注」

いろいろ資料的に押さえておくことがあるのですが、ひとつだけ。

「ノルウェーでは、「石油企業は国の天然資源確保に貢献するが、石油は最終的に国のものだ」という前提で、すべてが運営されていると説明する。」45P(注は、後ろからのページ)・・・資源はみんなのものという当たり前の論理が、なぜ企業所有になっていくのか？

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 038

・BSTBS「報道 1930」12月26日 19:30～21:00

いつものメンバー以外のコメンテーターとして、森永卓郎(獨協大学教授)、藻谷浩介(日本統合研究所主任研究員)、鎌田靖(ジャーナリスト)

い前回のメモ 037につながる事なのですが、地方での取り組み、「ダムをたんぼや森の復活へ」(森永)とかコンパクトシティ構想(鎌田)とか、いろんな可能性の話が出ていました。要するに、地方から変えていくというところでの取り組みで、たとえば、今地方では車がないと生活できないような公共交通機関の崩壊が進んできているのですが、地域内で幹線に交通機関を通しその近辺に移住を進めるとかの実践もできてきているようです。そのあたりは、もっと自動運転システムとか、ドローンとかいろいろ可能性はでてくるのだとも思いますが、それなりに合理性というようなこと、むしろ、わたしは、晴耕雨読のようなことで地産地消の農の取り組みが起きていることに留目していました。藻谷さんがこれからは農が成長産業だという話も出ていました(資本主義の枠内ではそんなことはないとはわたしは思っていますが)。このあたりは、「社会変革への途」でも取り上げていこうと思っています。

余談になるのですが、読書メモで取り上げている「反緊縮」のこと、「どんどんお金を刷ればいい」という話を最初にわたしが聞いたのは、ここで出てくる森永さんの話でした。今回の話のなかで、むしろ逆の経済危機の話をしていました。ちゃんと落ち着くところに落ち着いたのだととらえ返していました。

(編集後記)

◆月刊発刊、今回は特別に間に挟みました。今回は、以前に戻して、18日発刊です。次回から、とりあえず18日定期発刊を「継続は力なり」を肝に銘じて、続ける心づもりです。

◆今回の巻頭言、巻頭言は読みやすくするため、できるだけ一ページかせいぜい二ページにしようとの試みで巧く一ページに収めました。この内容——健康調査のことを考えていて、母の介護のときのことを思い出していました。母の介護の記録を文にしている、介護論労苦論批判として本にしようとしていたのですが、結局破綻して、ホームページに載せようとしています。労苦論批判は、労働論ともリンクして、更に「障害の否定性」の否定の脈絡の意味を出したのですが、いろいろな関係性を考えて、医療批判のようなことを書けないでいました。こちらの方の必要性を今感じています。そのあたりは、今回の文に続いてもう少し機会をみつけて書いてみようと思っています。この巻頭言は、前の回は実はもうずっと前に書いて置いていた文、この文が新年をまたいだ文なのですが、母の介護のことを思い出していて、すっかり気が滅入っていました。母の介護自体は、最も生きがいを感じていたときだったのですが、介護の方針を巡る兄妹との意見の違い、医療機関の延命処置や現代医療の荒廃など、思い出すと気が滅入るのです。母の介護の反省記は、迷っていたのですが、近々ホームページにアップします。

◆「読書メモ」は、今回雑多になり、三つ出しました。前号の続きがひとつ、これは追いかけている小松さんの対談集。もうひとつは、「反緊縮」の経済理論として、最近話題になっているMMT（現代貨幣理論）についての雑誌の特集で、実は山本太郎さんがらみで関心をもったのです。山本太郎さんの文もあったのですが、これについては、とりあえず野党共闘の流れがあり、コメントは禁欲しました。もうひとつは、アメリカのトランプ支持の構造を明らかにしたとして注目されている本です。これは、わたしは差別の転化の構造として読み解きました。かなり興味深い内容です。反差別というところから、どう現代社会に切り込んでいけるかというところでの大切な論攷です。

◆「映像鑑賞メモ」は、前回の後の映像リンクした、報道番組。最近、ニュースと報道番組のはしごをしています。地上波のニュースは官邸からの圧力が強いようで、BSの方が比較的いろんな試みをしています。「TBSBS1930」が頑張っています。局の上層部の方から、いろいろ内容を指定されたりしているようで、おやっというようなコメンテーターも出てくるのですが、巧くつつこんで、結構リベラルな番組に仕上げています（今回のメモはここから）。これが終わるとNHKEテレの「手話ニュース」を途中から見て、その後はBSフジの「プライムニュース」を見ます。これはフジですから、右派の番組ですが、中国とかアメリカの情報、そんなに歪曲した情報にはならないので、見ています。右派が何を考えているのかの参考になります。韓国関係の論調はひどいのですが、きちんと反論の突っ込みをしながら見ています。後は、テレビ朝日の報道ステーション、TBSのニュース23、そんなに真面目に観ているわけではありません。ご飯を食べながら、その後居眠りしたり、パソコン打ったり、ときには本を読みながら・・・

今回の映像メモの話は、「社会変革への途」の構造改革的な革命の途の話につながって行く話です。

◆その「社会変革への途」は、またもや原稿がふくらんだので今回もお休みです。一度、

序的なことを改めて書いて、次回は再開する予定です。改めて、サブタイトルを付けます。「——社会変革はいかようにも可能だ——」です。

◆この「編集後記」は、いつも長さがまちまちなのですが、縦版でだいたいピタリと終わらせるために、ここで長さを調整しているためです。ホームページは横版ですが、日本語を縦書き中心で読んできた関係で、一応正規版は縦としています。それで、「編集後記」で調整しています。

◆まだスペースがあるので、これからの予告を書いておきます。次回の89号原稿はほぼ揃っています。巻頭言は「謝罪」ということも分からない政治家たち」。読書メモは、・イマニユエル・ウォーラーステイン他／若森章孝他訳『資本主義に未来はあるか——歴史社会学からのアプローチ』唯学書房 2019 です。ウォーラーステインは、このひとまかなりまとめ読みをしていたひとです。昨年八月に亡くなりました。かなりのブナになったので、読書メモはこれだけ、後は「社会変革への途」と、その他随意に。90号は、巻頭言は「反差別——反国家主義——反資本主義」です。読書メモは、レーニンの再読本です。今更レーニンですが・・・

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>